新式和歌
躰之部
歌
伊地知文庫
文庫20
211
2

歌

文庫 20
211
2

明太皇帝陵墓
伊地知氏書冊

新治筑波ノコエテイソヨカキヌル　日本武尊

ヒルハ　九日　ヨルハ　十日　ヨ　火焼翁

發句切字うゑ事、

は　桐の　や　体おしのや
又行やた云し

花や　言　かれ　上　ぬ　り　の　中　ま
やりぬ　入　ち　ぬ　口　お　と　も　又　体　生　と　も

原田文庫

云なり是ハ切字ニ用ゆれハ切字ニなる
まじき切字ニ赤しと思へハ外ニもあり
一字ぬしハ切字入るべしかくし須
句の末へにかならず留るべし平句ニてハ
てにも留べし證云ハ

月や花よりみる色もなき草

是ハ切字ニ用ひて也又

山や雪きえて鳥鳴声の外

是ハ切字ニ用ざる所ニもとむる字

ぬしにかし留るまじ是非をとむる字
ハ入てもあやまりにハあらず須に心得
まて能く心得て見るべし

とゝめや

雨ぬりてながれ雲や晴ぬらん

かれに降雨の中に雲ぬけて
雪きえて花にとゝめやと云べくかくれ
なとく指ととゝめしたり云ぬニや文字
入るハ切字にあまりなり余ハ是ニ

可参准

疑のや

思ふやうたてゐるは

おのれ言や歌のん　花や咲らん

はるのり　歌て物と疑て詞なり

さらん疑のやと云て也切字也

歌に於や

ふなりとやふれなれ

と祈ひとり白の赤みやと問り

歌に於やと云て也切字なり

さらん　能く問詰て

はのや

今ハくるとハと用ゐる

はや切字なれる　云なれ

きけるや　西うくや　なるの類ハ

切字なし　今ハくるとハ早の文字な

歌　左くの文字なる　通ハ　切字

知て　行くく師伝を　詰て

拾や

かりてもかりてもまだ思ひまや

かてさりとて似てかれぬ白

の末は云はぬ拾やとは云へ是は

切字は歌にも

関白内侍

あらぬ世にたぐへしをきし菊のの

露をかりみと思ひおけまや

思ひたやしうなくをきし袖のうへに

露をとりあつめたる中の

雲の中のやうの日の入あり

そもそも雪や霜や星の類なり

雪霜月星雲霞なりと云ばく

云はかりは一入さり共中ばやとは云

又

梅垂一行やすみ染の袖にて

行のそも中の七文字は二り双あ

間より入るりや文字は切字なるゆえ
ゆえてと留るくこまかこうるやの入
さらり白おさへ文字なるゆえてとは留
らぬくゆえ無弁からりし

八や

上より飯の文字八つめなるゆえ八
やと云くし切字なり

九や

上より仮の九つめなるゆえ九や
と云くし切字なり

石二ケ際はまれてやの切字なる要也
極秘の秘く云ふ伝かりなる法

為所や

箱崎や神のちりはいたすて
こまかく春日野や信太やとの類
切て上れる文字よりて名前はくや
と為一ツやと云くし見はこまき極
腰れや

梅須遠山のりやこと人
ゑれは中はれ七文字のすゑ至と腰
はやとゝ云一白は極るゐいろりむま
一乃切字く
とみのや
なりとあるも人と歌ひて
きれ人りやしいんとんやと云花
をやといんと花やと云やしの白雉
なりそい思ひ始るやしいんすきた

各字あらはる所始るの上下を結と
盗て仕立あるとみのやと云む
切字は用なり そい極秘のゆゑ一く
起して切やは入きり白をとゝ文字
なくしてと留る事 無しら事
ところ〇てい何時もくるかはれ
ゆゑ書頭も云り
はくや
ゆる花や花は咲きて速てん

疑ひ地もかなしく又志ふ似
しり給ふ師匠を給ふさく

こさまれや
ちるや花や雨ふはまて迷ふん
見ぬ所こそりやしい云切字なく他の所法
と云へし

一切切字の事
三世ありしとは過去しあり有しなりの類
は過去のしく見ん〜きう〜の類は

現在く有はつしかはまつの類は未
来なりは過去〜未来まては切字は
なる所現在のしまては切〜見る
むるしも云く志う〜不論はきいは
不通ては悲はまとふ捨らる
感〜是秘事の秘く礙 崖い
逆い 面白い乃類是まて切て
何時も新成れし云感〜所かち
感う所

ぬの切字之事

ふのぬ　をりんぬなり　ふの如い切字はうらし
をりんぬハ切字しゃ　雖ハさうなきもの
思しめなし　ぬの類い　ふの如しこれもの
如思ハ如なり　如ハをりんぬし　是ゆゑ
他ハ准不別　をりんぬ　切
字なへし

うんの一字之事

うんの一字ハ　稱い花とうんと云て
ハ切字なれ　是ハ花とうんとの
と云ふみの　ふ　ふみ
花とうんとして　い切字ハ成　是ハ
うんはなれ　云ふなれ　い　ふ
なすうえて　ふ　ふ
又極秘の秘　ふ　ふ
無しこと　他ハ　なし
云ふ切字　併是ハ別ハ　ハ
ふの如しして　要所と能と　ふ

高まなしさりたる仕方なし
其所要し

玄妙発句之事

玄妙と云ハ来まして発句とそ申
発句しとそ云し 但句の間まーそやの氏
三字のうち二字ハ入してハ発句とハ
申候天ハ下ハ知る人ハまれなり
秘事ハ上乃秘し又之世切として
之玄妙在来と仕之ハ来まい太のこ

字ハ入しても発句とそ称して今し
わ候是ハ秘の秘せ

大旦ニ発句の事 心切れ云し

大旦しとハ切字ハ不入して仕之ち
発句云し是ハ入り発頭と下の
句ハ縁の地ハ上ハ時ハ
ばし あとえハ
露の行ち庭の芭蕉乃松
題しそ 和面ハ 夕日夕月秋

うれの事〻〻是極秘の秘伝なり
[illegible]
三名切変白之事　大口真奥
花ハひも柳ハ髪をとき
なかたゝ春日もみゝ玉はゝ
文月雨ハ岩の打せ若ハ
うれの事〻〻三ツ云ハ三名切と
ハ云〻是又極秘なり大ハ三名の
玉ぬ大口〻〻三名ハ三ツの切ハ能〻

秘すり事〻〻なれハ名ハ[illegible]
[illegible]
さまく第一事〻〻〻〻〻〻
ひても白雲の事〻〻〻〻〻〻

変白之事
[illegible]
是ハ東[illegible]
[illegible]
云〻うれの[illegible]

不得ていに有之候ハ、このゝぬ、しなく
家秘も一代の内に書すとなり
貴人ならいに又名別にあれ

切字なし發句の事

朝雨に新しき緑の小夜衣

此題上句の表句に切字有之事し
不習して初りはるし筆に口さ
書うりさしなし

抑發句に切字入事哥入腰句に
て別に二句にしなく立ハ上下に
二句に一首に結て腰あり表句に行に
もしら須一句立に地なし句に切字を
入事二句に口ハ切字入ハ一句に二句
に張句を原に於俳諧の業に表
句に出て於云有く腰句にいる表
句にたゝ方有にしら切字入出
ハ是極秘の秘傳文事なり努ゝ
他に漏らす勿れ

神祇　教　述懐　雜常

はつ門の教白は松と共に高きとし
はるかにて仕うまつる

述　雜

はつ門の教白は物まうさるべくたくして
仕うまつし

右二ケ條は源さね朝臣に俊宣有り浦事

賜る白三躰うる事

賜の白紙より松一枝はつ教白まうふ
て仕う遣はる花の色西白きるは松と
なれる白紙のふる歌を方れ
ふるみなる仕うは教白まうさる歌
又　花の盛は西白しと云へれ
はるえる梅源よなれる仕うは對
仕えるなる仕えと云へ此二躰は源人
のもちきてもくるる源さ
取る紙一紙と云へ折りて入る花

なるゝ云々波乃碑と対者ハなるべ
き歌なるべしこれ何也と対て
れ神のことなり比神ハ老人好なる
ていハ遠き可有事なり爰白髭明神と
事ハ別ひあらんと思ふ
かくいへハ人ハ一向也神さ
地ハ云ふ共思ふ不論也身を慈し
我ら少も下ハ人ハ発白すハ
取成付の賜くるかゝる能く

矢へ行ふ
賜ふ白のて前りの事ハ也二字ハ入
ていハ前りかゝ無て口傳り
此門かゝく秘する事ハ古を抱ふ
かゝ 雖意ハ異ひ行ふ無し須也
前り和白なりとハ義ていハ者かゝ
次百韵連歌ハ有時ゝ事なり
但貴人好ハ士成ハ会し須
賜の白を示事前りとハたとへハ

彼ごこはまるなくく留るハ色香を歌
為なりまた彼をこけりまて丁心乃ま
氷の文字留りと書文字ハ体め字ふ
へきり抽く余い推之
中歌百首後白河時腕もおれ〳〵お歌
の初を抜て其外を歌ふて
留りても中歌の初すまハ今〳〵か
彼とりて古歌を抜て其ホハ常まわる
侍しに中〳〵書人好きすてハ世之意

なりん
書り なり こそ 此こりいはきも
留りし 糸也 社乃文字なり
是皆腕の白留りは秘書之取
唯いはとても〳〵字留りまのと世
おもつ

第三留り之事

中三ハ五て留りハ發句かと三留り

の時梨と有事一〇

少へ入りいたき花の盛れ

の花の餐白の時まさりまてとハ間

かるし是ハ花のはりまてと仕

立事多白なきハ仕事まて

仕立事て

てまてに通ハ餐白も有つさん

かり待まてく間て昔う次組

殿まて春迄まて紅葉ふ〇の類ハ

殿れ長迄れ紅葉れと一白ハ仕立

まりさうさらく白も有つさん

時ハ紙まてと仕立ハ餐白まれ悪

にてかるまて通つる故く長宋まて

う殿くまて白と類ハ長宋れう

殿れともいてきはるれ〇かる

次余ハ准之紙弁へ〇おさ

つ字ハ常れ

小間りハ丁文字付丁一白紙まて

仕立之ハ當りの能句作の云なし
付工夫すへし
もれしハ其當りハ手爾遠波にに
前句ハなす事とも只稀にしある
前句好む事ハ當りと心得有へし
文字當りハ縦令ハ其の花　時鳥
秋の月　嶺の雪なれハ當て春し
かく次む花鳥月雪の風ハ風事
誠之柄なるれハなり　此當り百韻連歌

なすはまに思ひて次に他の句へ移りと云
とも貴人好きなるてハ云用の事し
是等ハ連歌ノ奥儀深秘にて
殊ん當りハ發句云ん神の時に一飛し
書須の云り龜甲當りても當りて
好むへし次唯成るも當りにせす
此思ひに是へし

四句目之事

四日月ハ人のゲ前へ引て見ること
らぶ事ハ事なり八日ハ
ゆゑ自然前雖白ふて行かぬる
時ハ云へ共雖ハ海に深き
ゆゑ白雖ハ八日月挙白も
同前

七月月之事

一説雖ハ七日月の定説と二の
雖の月ハ定説ハ十三日月と二の雖も

ちがへ裏ゆゑ花ゆゑ月の定説の
定説ハ八日月十五日月ゆゑ月の
出り説をもとゆゑ月と嫌ふ
但し七日月十三日月ゆゑ秋説事をむ
すびて月をしるしとも若
かり説雖毎年ゆゑ雖事
なり共七日月ハ何とも月のせり説
ゆゑ時ハ事ゆゑ定説をうこと
とハ云へ共一日も引ハ月待ぬる

[illegible]

月乃為ゆゑ所用なれはあるとや

是ハ其頃紙こゝ[illegible]

花の白えて事

月花い同位なれ共花ハ[illegible]

[illegible]

上てハ者[illegible]

[illegible]

を待かねるく別白夢想抜言迫

義ハ何ゆゑもあるを所ある懐帋ハ打

見紙さうゝ[illegible]

乃秘法なり羊羹花面ハ色ばり附ハ

樹ゝ月ゆゑ[illegible]

事もはゝ[illegible]

[illegible]

同より迫紙[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

拳白ハ長保三年[illegible]

[illegible]

社と云前白之事

社ハ自然社他の社二種を之自の社

[illegible]モと云假名を入て同じ

の雅ハ生[illegible]ハと遠へて付る白もあ

らんなれども只うちそ[illegible]の面白かん

社と云白ふ[illegible]と付るる他

白ハ[illegible]前白社と付白ふとう

めて[illegible]と云へハ[illegible]

[illegible]の[illegible]

きかるゝ様なる志者しかりはべしく
や五六本を葉ハあ岩わをとうもう細
まて残んとしてのまハくうもあをを
絆と成て子細なくきこゆる也なり
毛うさほとにはめとはき事なるハい
意角好てとあもあるに又
他の社ハ大略ハ遠へ付る也と能
くハ合て白髪ありもし是も須と
付てハ前ゝ様ハきく但他の社ハ髪ふ

小て残んとハ白ふりて付て或ハ
モと云ハ髪ふと入て付ると也遠ふ答
ハて付ふ事ハ唯ゆ能ふよれく

なとゝ疑ふ前ゝ之事

付ゐ髪といふて付又髪ふ松ふ付ふ也
ふ名ふ前て付ふハふ細ふ白の
社ふとりてゆふしふとハ前ふふふん
合て髪ハ髪ふ又も社ハ形
なとゝハ付ふ事ふ何ふの白も髪合

せんてすりくと云ひ名らをん時ハ
子細なしとみて吟味なんす事ハ
はなきかるおろしまおろしハ仕るまを
紫遠山さりと思ひて付るの学ハ
心ばせなりしに是れ要のすく
ことと云前白ハすく
蝉の鳴音ハ秋ちとそきく
紫ばたの秋ハ日ハ独居て
くうつ地思ふ人なるとぬきハ

芦山の志ゝうと陸を行ハ
大ハ付白ハ東を紫を紙く
白月ハ色ゝとと云前白ハ
東を葉にて付りの余ハ紅ハて
付りの有百変ますて残んり
付り事かりて時と潜ハ白
ゆとと云前白く事
芦も東を紫にて付りハ子細を
乱ゝゆとと云ハ一りくむきハ事

また紫の紙に付て聊か申すべき事
あるべし 禁忌
はなき異の分のみを志すべし
むかしみしかの人はなき世まで居て
はなはだしく思ひ入て云ふ人にて射
遠へ寄付るかの人を遠ざかるべきなり
趣して我ひとりの人にて付かはさのを
好まざるを面白くきこえぬ物也
をもしと云者多き事

問ひなる人をもかるとかはんし
月なきまゝ曉うけて更行ま
俳諧をするふ月の夜とすべし
はなはだしく付るはしく説とて稀に文
に付もしくは治定円分て一かたう
かさり紙に をもとと云る付句ハ多年を
経なるべして付て尚ハ子細なし又
物はなれ事の尚ほうるもしふそをを
の二ツハ大略同意なれ物也去をとと

云詞物毎に云添ていとゝ詞くわい
付表に付てもよし

和と云に詠と付る事

少日かゝれ乃山ぞ戸ん て市ゆ
り毎に清ゆ行ちを出れぬん
同風に付てハ子細なし少日かゝれの
山て戸んてゝ市ゆと書きかゝ乃ゆ云
り毎の波ゆの岩ゆ出ぬんと事も
金花のとすり有に金花のとゆ金花

り結て上ゆて毎や清とゆ出ぬんと不
富士てゝ白すゆ結ハんのゆ雪を業ゆよ
く清てゝき毎てゝ結ゆてゝ拙ゆるほと
小詞の出業も拙作して打游
て少ハ古すり飛去て詞思ゆ中に毎ハ舟
上ゆのゆとゝたゝ小ほと毎ハ結も
付ゆて清ゆて初んの業に拙て
をく舞て事急に付清ゆ結
事なり

下総台の浪人より付紙し事

なをとかくしたときは繋ぎをくらん

住吉の神より祈ぬ[illegible]

人[illegible]や神より[illegible]くら[illegible]

[illegible]繋[illegible]の[illegible]連縄

此下の台の浪人より付白[illegible]

[illegible]付白[illegible]疑ひ[illegible]白ハ[illegible]

[illegible]聞ハ[illegible]

[illegible]聞ハ[illegible]

武ハ地の名[illegible]聞[illegible]

[illegible]繋して付[illegible]

説留ハ祈る事

自説

恨て[illegible]

[illegible]今ハ思ふ[illegible]

[illegible]上又ハ人の縁を云[illegible]

[illegible]自説[illegible]是[illegible]

余[illegible]者[illegible]上[illegible]云[illegible]説

[illegible]雖も有[illegible]付白[illegible]聞[illegible]

若[illegible]聞[illegible]

訴付ゆる深同意ん病遊ゆゑしき
なくおもやう自讃にハ小と留て
難あるましきか一葉途一句に新考
様によりてし能く人の興し歌も
かつてハ名不抽く紛らし言行年何其ならん
是自讃なり

他讃

淪しとやこうぬうしにハ思ふらん
かれに人のよかる句によその人くと

云はなふてよねる越他讃と云べ先はハ
自の事伝云出し問答仁に云ふてハ
てと留て若しかる滴し抑し出す句れ
名留子細有れし先聖いつさ文ハ
と留ても前句に不背抽く句弁に依
為し清きハ他讃にハ調とも句作も
善く留る作にも抽とも多ちとも
留るハ前句よくう前合せよれ抽し
て獨字に付ても不定して精さハ別て

まず、殿白紙をなりぬしいたに
一白紙くれ前へかけわ長白い
西うへ他筋疑ひ白紙なる
事也一大事しそ又ゝ前のもとと
紙疑ひ付るハ白布をさへ字ぬさ
へ遠付くわ世ぬてと留て子細なんへ
所詮一白紙ゝ
事なる
度の雪紙沒法第て出つる紙ゝ事とへ申ん

是他筋ゝ
定筋
次風ハひさわるかゝ紙通原社ん
如紙ゝ同法前紙ゝ聖徒ゝ指書て
云ハ事て行るを定筋ハ一筋とも
いへ是ハ切ゝ事に社んとゝ和
書ゝ筋是ハ前ゝ和の上社ゝ
をて付るハてと留て書ゝ
ハ一同の前ゝ社ゝをてハてと留

かるかるんの紙に白紙切形[illegible]歌
乃ち後鳥羽院のたまうり歌も今い夜きゆんん
是指流く是ととの三脚い表ゆ与きし
事なる紙ゆ自他定のいうし書き
歌もあるしまいて末のめうり紙いも
流の極秘く帯に跡ゆ代ゆり次金
かるしん

上紙白十九こ称
長宗なり打しも花のちりぬん

下の白十六こ称
雲いく紙しゆ面紙ゆるん
是伝ゆ下くゆなるといく紙を入て仕
立ゆるる十九十六といるくの紙ゆ下く
小ごゆあゆり紙を入金仕立ゆ時いいり
とてゆこ称て若ゆの次式紙歌も
久方ゆ光ゆ柴ゆ白に生ゆ紙ゆのゆん
是おくなるて花のちりと下くゆ持せ
立ゆるる

二字くれる

風の音ふ秋や来ぬるとを[illegible]

もをれらさ面〳〵もみぢ[illegible]

いづくとなく遠ちの中

ことかとよかんくはしん

如氏義白の切字なかりて付句続とて

初句に有ふ二字とくるとい云へ共

て疑ひ[illegible]前句に時付句ふ切字

なくとも[illegible]と称て[illegible]

弄ふも

さびしふ[illegible]ふ[illegible]是[illegible]なりの[illegible]

[illegible]花の[illegible]世ふ[illegible]

秀句と称

村雨もあり〳〵初瀬ふ音[illegible]

萩ふ紅葉のそよ[illegible]

[illegible]て[illegible]云りけの[illegible]と秀句と云

なりぬ此[illegible]ふ[illegible]

[illegible]称て[illegible]

重縁覚

御法は〳〵雪に氷雪に降ぬらん
花も紫も嵐に清きてちらぬらん
かれに一句に地紙二つなしへ去る時は
疑ひなくに覚と縁て菩しかり深

安心乃覚

こゝろからふ生死の嶽の道なるらん
か様に執心紙こめ深月前紙に去伝云
是をと安心の覚として切にぞ疑ひなりしに

解んとゝ縁菩しから深志り是ハ老人
好士なりてハ書置きつき地し 秘上
極秘の秘
やいふこいふ何 何なといふ 何事
いりく 都て疑ひの詞入りぬ時ハ覚と縁
そしりう深能く心得秘すへし

手留り三ヶ之事

人心よりもかはらしやと思ひしに（過去）
かくと我恨む也つしとハおもはぬ（現在）

花もとゝの花もをとゝの花

不宜

梅の花のあしたはふく海の

かゝれよ三枝をいつの日の花白ふりて

はるゝし前後とあり白ふりたる去の

まゝとなつきう雨論なり白紙ず

全て付白は面り考へ

いちるり雅う山のいはれん

梅の花の源もなかりしの

梅の花は源もなるはるの

なりしの白はるのもふるる去

の翁く　私ふ云ふとそ去のの面りは

上代の白梅うりくさう見をむしと思ひ

れてまるしるのい皆りられるの梅し

習い芸林用し姿いおくりられて一白

のをうりはまるとすくしられはの同白

一切は白をを葉去り是の雅くは

白

おなじ国にて二首

さくらはなのちるとき　とめたるこゝろを

かゝは有文　とあなるは文なり

滝の白きをちらくやまの

月は次を山めり　紅葉

是は紅葉なり

春は夜の色なり　もれ

横雲山陰よりはるみなり

色はとめたるなり

拾遺　夏

みかの原　たまんし

梓弓　方めり　ところ　なし

ちるは　なり

走なは　人　なし　ふもうとなし

いかり　萩　かなは　なん

菅　なし　なる　なし

かすむ　なし　なし

風　なり　なし　なし

山付白たゝて[illegible]下数[illegible]方[illegible]ち
白よ同岩のくゝ[illegible]てゆ[illegible]付[illegible]
をらく[illegible]字[illegible]清水[illegible]赤[illegible]よ[illegible]

よ[illegible]赤を塗の事

花をつけ枝[illegible]ん[illegible]よ雪ちりて
くゝ[illegible]ま[illegible]老[illegible]ま[illegible]
波をつけ花[illegible]
[illegible]をつけ[illegible]
[illegible]

村雨[illegible]雲をつけ山[illegible]
[illegible]
[illegible]白の赤[illegible]むら[illegible]
[illegible]白[illegible]腰[illegible]
[illegible]赤[illegible]
[illegible]文字[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]白[illegible]
[illegible]白[illegible]
[illegible]同[illegible]

浅き事なり

十二月の季を葉の事

是ハ十二月をさし入夜半より雨ふりて

朝ハ起て起出つきかりけりよ

十二月といふてよむとしれ下よ十二字お

きハてよみた第一の題も十二ならら

よに文字入たる時ハ第一の次ノ傳

是ハ前れ与十二月季をとして同し様の

事なり季を九ならるうよかようぞならぬなり

何事も一様ニ定りてハ不可有然ト心せ

下題十六ヶ月季を詠之事

うたしみるゝを短ク備給ひら

是ハ十六字をよみて下ニ浦よ待と

二字付て仕立たれ十六てよみとく

とハ云心無して十二月季をよくよも

ちりて次第によむうつる云歌も文字お

まりて色紙るゝうさうら時上下九よ式

趣よ仕立式ハ是様　あまき　是様

八月　日祭　中酉　上申　いの

[illegible]る[illegible]と[illegible]二字付て
一白社前り[illegible]
きた一白ふむ[illegible]文字なる[illegible]
[illegible]加[illegible]前りく[illegible]
[illegible]付て[illegible]前り[illegible]
[illegible]の文字ハ[illegible]
下社白社前り[illegible]事
[illegible]

[illegible]ふくあり[illegible]の白ハ
[illegible]ふ貴人老人好[illegible]
[illegible]
字何も[illegible]
下社白社前り[illegible]事
青ハ[illegible]ハ[illegible]
下の白て前り[illegible]事
[illegible]
[illegible]

[illegible]貴老好なりてハ好しゆゑ
始く拝ものなれ社前ゝと同断

下句白露も萩の末

あせかりしゆゑ雫ハ[illegible]
くるかゝりし雨を[illegible]
散り花と人[illegible]
拝せすしてゆゑ人さうくゝ
見いふむくよりあり拝ハ待もく
[illegible]白露とそりを

てハ宋玉と萩と[illegible]
つきりなるり

下句白露は萩の事

あるなんて世ハ遠さうは
今こうといひし秋を更は
見ハ二句れ[illegible]
[illegible]を[illegible]
彼れ[illegible]草かさあるは
見ハ二句れ[illegible]

あはれなる人はたまきはる事はなり又ま
ちまとはるもおろかなるもの　余は是なる
やうに此二神の趣をまとてたらん
小雅あり　然と奉へ思ふに
次は極秘はたまはるべき
月すむ心の花はんてはし
是はの字よりくわんとと信くらり秘
ゆるしは信如来はまるすふて衆医
きはり秘しは風はたまはし

くわんぬも老小めてはし
きはりがはうもは梅はんはし
皆とはまるもとは深秘てく是は伝
はまとはくはんはりは来はは信紀
なるはは来はは信紀
是はんのつとうれの趣は者
明はさまとは此は貴老
好すてはこはは風はは事はあれ
はまはまを聚く事はは趣者

かゐもれ

田子の浦にうち出てみれは白妙の富士の高根に雪は降つゝ

是亦秘頼なり

眼目の句に清濁のわかちある事ハ家の文

字をたゝし可秘ゝゝ是ハ勝劣の句の深旨

なれは書つきはいはり極秘なる所是

よしあしみわけてあつかふへきなれともおわ

清濁の事なり何事も深秘を残

さはかりなく家に傳へ傳ふ也けし

志しかほれの出る色を知る事ハ和歌の

てハおすれすしく知るへし 以上極秘々々

跡よみ歌輪

はしと云詞の末に向ふ字を結の事

雲雀の鳥を書くはもとより

雪消の水にて下になかれ行し

春ふかきに限りて志つまりぬ

風ふりはきしに逢ひてみなかも

夜野の草を花ハすくされ

後世の第七花いのこと

みなれぬ舟と書ふ紙

余い色よりてらして糸にてしぼし

上紙白十六本を除の事

くうし花やちらす蕭黄嵐

是い十七文字はうまきたやいのこの字

をやとめ字は書てて花やちらしに

てすむ所は十六本を葉といふく

上紙白十八本を葉の事

なりうけい島や声ありほとゝきす

是い十七文字はうまやかく仕立なす

紙白本をこうりれふ十八てはもとと

云くゝ乃てはを葉たいふく　の紙の仕立と

きりうれい發白本は白作仕立浮

ぶあるひいすきたてはふうりる迄く

紙此次ふ人生し

白本を除十三神を書

ふをこふ三紙ふとも紙の白本をこ

心ハ上ニ言葉迫前ハ下ニ言葉是
なり先詞のてに言葉とハ是はしの
云ふ人字ニて句作仕之腰をきまさらね
よそふて すかとよすゑし句無ニ
捨字を見越へは一句留らぬ留之
又ハ一つ心をも辨とて余ハ皆ニ
ニ言葉ハ餘情ニて仕立句辨なり
たとへハ
是乃見れバなりけり出る朝日影

けれは朝日影といはんとて藤の月の
なるとし云下して言葉より上ニ
言葉くせ辞歌ニも
春日野は若菜のすり衣手のてかすこれ
此若菜とていはんとて若紫といひ若
紫といはんとて春日野と読出す
言葉畢竟いはゆる心の眼あれ
ふかいいはんとあくし捨上取後の句新をも
通すへしはまとといふに一句ハ餘情

なき故とて無用なれ共らぬ無益の細
工をもてあそぶ事なり次一句の趣向の詞と心にて
おもしろき仕立なる句體之事とは
我乃こそや哀深しい新成郭公
はつ日上れぬ小我のこゝろといへるおも
かゝみいかにもして人もさしかしいつれ
此類あさましかく哀深しい新成にも
云出てきりて侍明せん人分ぬく道と
是等の新いとまかりして豊なん

とせ侍からぬ次正法なとうちひとつ句
一も付て一句の正格にありかたし此趣
天下の句は自他事を近き有文
無文有心無心とも事を求め留り こうめ
難句句心姓くとりて捌付合と
求めて極とて極一句なしかしかれ云出と
隠しされいらのてゆるとしい一句くみ
あるまし
廻前の手ほ事を残とい是よりも上れ

変化へかくして一白はやまり紙の仕
立るの句
雲ハ
かくれはて友なれぬ秋のさびしさ
芭蕉の句
友なれぬ秋のさびしさ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ
かくれはてしいんとなりぬ

是ハ[illegible]氏[illegible]ハ[illegible]
白のすゝかゝくるゝて[illegible]
いかなる[illegible]成[illegible]
付て[illegible]

三句同意[illegible]事

又云事ハ[illegible]と云り白紙[illegible]
[illegible]ハ[illegible]郭
乙と云白ハ[illegible]
松風[illegible]

白ハ[illegible]張なとハ白[illegible]
余ハ淮[illegible]
不[illegible]

上の白ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

をとこからぬ是ふて留り紙をさく
字とて あまたかく人の主をあるし
はかりをはつへ字をもて末のよせふる
すすて又をんの白い留りとり に傳
て留り 泳手字紙と云事
あとへいとおてしかやなとと 数人をうの白
絵書をて 留り末ふ主るおさく
字なくして白をさるし 紙はの
七文字の内より 秀句あきい おさへ字の

しふて留て若しかはたのとく
秀句ふ仕又をさへ字へをと泳手
を葉として輝つすし余いそそて准
ふるへ

いろは法てみを葉の事

春日野に いろはるる あ紙果て
いろは里とあきあるんと末泳て紙
ふ 春立 春立 是ふ何とやらん
大原遠国の紙 ふ事申をて紙ふ仕

三千院長吉野ハ[illegible]月ちと
遠ふもとし対てさわてはさて
はるとふ仕立てハ月とも雅あり
ぬ[illegible]

月乃秋と云詞書

月ハ秋と云詞ハ[illegible]
はてすす

月ハ秋花ハ春にはしくあらさ
りてハ宗砌法師の歳旦吉今の答

一と紫式云はめしたり白ゐれハ八月の
秋とハ八月十ゐ黄ばなとあ[illegible]
宮殿ハ月ハ春の花ハ月ハ春さ
ふるりはるよと云也事也事
物くさわハ宮殿月のくれはとす
て仕立ハ月の秋とても花し
かりしし人の春とも可秘さ

かもとかはしのさうひの事

物代鏡ハ春の時ハかもと留ぬ

物をもとり付て浜定さて百舟の
時はかはらはと為あく濟ハ
情人のあるぬまんのも
ものいうとかつてとり舟なり
長きすとまるを日てつらやハ
ひはきるぬハんのんうは
ものハ浜定さ出さり舟又とうめうり
舟ものも通しを風
百人連歌之事

夢想ゝ紙の連歌ハ前ハ
三夕想はさ歌と書ちはりは
百人余ハ唯へうあ三ちはて日待は
連歌ハ日次の日ハ今日かは入日
出る日すをうはちはうさ
いハ日はまりいまるを懐紙ハ日の
出きハ待はかなとうるすは
うを紙の思惟はちりはて紙
紙弁へ濟ハ遠情の連歌ハ

仏書依経は帰する也 文字の出る
ところ所以は 四八句は内より六門より字
もすなはちあと陀羅尼より出て
是陀羅尼帰する也 是よりまさしく余
八田推あるや無して 祈禱の連
歌にも遷ほども帰すとあり 其上神慮
をとすこしめんあなたはりふへはれ
いかしへは思はおほけんといふ
かりしく 五音相通同連歌を及

白ね文字の七文字かね腰をくらりや相
通のそむ常ては神慮の叶はさるなり

五音相通

牙 歯 唇 舌 喉

喉
アイウエヲ
ヤヰユエヨ

歯
カキクケコ
サシスセソ

舌
タチツテト
ナニヌ子ノ
ラリルレロ

唇
ハヒフヘホ
マミムメモ

五音連聲（母音）

a アカサタナハマヤラハ

i イキシチニヒミ井リイ

u ウクスツヌフムユルウ

e エケセテネヘメエレエ

o オコソトノホモヨロオ

たとへば連声とて白けくもりてとは
さまざまの物ゝ形待ち懐事の間ま

[illegible]
百姿の庭よりあれ袖ぬれて
[illegible]
あゝ加ゝ加ゝ事
扨て形待の連歌よりあらんといふ
[illegible]
とは白の糸となりへもむてなく去ぬ
なりぬ[illegible]
玉神の云歌[illegible]

弓の間百韻ばかりかくるこの事なれば
當代略して面八白なれば内たのん將也
色きとなり

ちはやぶる牛板の事

紙續紙言葉の懷紙競進の筆立概
小下知して牛板競と云懷帋
上下に懷合なり お筆立上て賦の
字書無し進と云三ツ折用ゆ
お内へ入て牛ぶく長ふ懷紙筆ばん將也

腸筆三之事

本來面八白ゆえ内結構定きれるし
ゆえ 筆三之八おかるゆえ武八本事
名和とも宥之事也 仮名白ゆえ
好む所ゆえ 懷紙白ゆえ 常み好
白ゆえ法ゆえ 成人ゆえ

拙なり

神祇 釋教 恋 雜常 述懷 餞傷
長ふ牛ぶく 牛ぶく 牛ぶく

二文字句の事

芳野の山よりきりかけ　二文
をとゝ綿ゝ　二文
社の風はみなとゝ　二文
是ハ類句をとゝ字入れて也

花の梢付句の事

花ゝ咲んてくるすゝ　表ゝ
遠梅月ゝ　表ゝ
花ゝ花ハ花梅ハ梅と　表ゝ

ハ何時も若ゝ花の
花を梅の花ゝ付るせハ悪し
然ゝ無ゝ下ゝ句ゝ付き事

上の句留り花事

て留り　ゝて留り
も留り　社留り　梅と留り

以上トモノニハ試ゝ作品をゝ入字ゝ
花梅文字ゝ七文字ゝ腰ゝ句ゝ
留ゝ中ゝ句ゝ　一句ゝ句ゝ

[illegible]

く留り　ウクスツヌフムユル式九の仮
[illegible]
なり留り[illegible]
[illegible]
高砂の尾上のかねもとしのく
月乃[illegible]又[illegible]

[illegible]
も若かりし

下段句留りの事

て留り　み留り　以上トモノ二八
[illegible]
千句ふも一ツ[illegible]
[illegible]
いろ〳〵[illegible]
[illegible]

バ好ム色ニ依テ、ウ花ハ孫ヨリ
留リハ稀ニ出リト云秘事ト云トン
得ル

ほゝ留リ　かも留リ　かは留リ
やゝ留リ　いさ留リ　ア七留リ
も留リ

二又ハ三の句
以上トモノニハもとゝ字ヘ字シ
みな留リ　ウクリスツヌフムユル先ノ
假名みなと云上ハ不通して前ニ

如シ引句ハ上ハ又ハ立リ
上下ハ又ハ留リ末ハ必ス文字エケ
セテ子ヘメエレ
上ハ句ノほゝ留リ一向ナル秘事ハ板ニ云
リテ書キタルハ有レ但花ノ
好ミ一世ノ二ツトハ申サヌ
人一ツモ申サヌ事ハ有
トハ云リテ申ス事ハ
もと文字ハ前ノ同事ニ云リ

上の句はなり留り
をとゝ字前よりとゝかり下ことかく
一句よりて前へ引ちらし後へ引ちらせ
られ多れ物しかさよそ下ゆの一字能ふは
をとゝ字ゆゑ苦しうる歟

登無重切
濃心物之
毋屋遠柳
丹秀者字
波句一知

上の二十字和して三十
一字の数を詠る歟
拙蹟曲可受師説者
受師説共唯一見而可
保心耳全不可再吟
者也極秘之秘々

太平東壺叢書 陳子青花本三代之

密書之説也希有傳受而今書
記所載中一首秘歌於世知者
稀也疎不可高吟是誠深秘
哉可秘可恐努不可有他見
看也

俳諧之九躰

俳偕　誹諧　狂言
鄙言　謎詞　滑稽

俗語　世話　讒言

第一俳偕躰俳ハ調ヲ偕ハ和なり
長歌ヲ連歌ヲ俳ハ調の俳偕
と云躰くたとへハ人ハ人ハ連歌なり
ハかいるを云て俳ヲ用ひたるすといハ
連歌ヲ俳と云て俳ふれし
かすめるとすれハ連歌ヲかすめ
とて俳よりて俳ヲ用ひたる類なり
第二誹諧躰さ程事とゝむく也いん

是誹諧なりたとへハ弁と云に徳春か
ど斗りは連歌なり　懐素礫なれとも
体ハ誹諧なり　余准之心得あるへし

第三 狂言綺語　是ハ心ハおかしからぬ詞の
可咲る体又ハ詞ハをかしからぬ心なれ
されなから自体くさくやこちやしさよみ
みるすれの自語なり

第四 鄙言　是ハ田舎詞を用る体也
たとへハ椋常臭といふ鬼さはこきぬ

にいかほしとにそれとたこしいは
はみ私の内に用てはかねる事
多かりやとそれらみれ物乃名を了管し
て用そし　又ハとくやくハにみ信をとわ
くやくいひ物りとハにみ紙新くしいひ
そうつなとにみ紙をハ南へかれしと云武ハそ
するハ引中をみえらまきいなかめの詞
の類なりへきとさいとらハよ鄙言と用
る事なれハとてあ向不くへの中生

ら沢おけくつうひもうきぬかるとなと
云ふす沢ら沢お寄ら沢お寄を乱人のわま
祈くれわつうわ如歌書或ハすもなきぬ
教なるく取角ら沢とうれハまてや
鄙言をくんと興
筆文雑紙ハ沢ていうを祈と亜よむく
たくハ人よるとけうけてむるの人よ
とうすれすらいひよせうりあるハ
きハまり末毎よりく乱んうれ

と仕立ていくもうて梅しろうせまき
きまてハ二字返音う庭の雪
とまてていくすてこうしとうせ又
上已ま
名ハ紫てと二つまいきりの酒
とーていくもうて り紙酒とまうす
絡ぐ又付白ま
ふらまてられ苦紙墨
筆とかりて火事ま焼ほ

是面〳〵いろ〳〵社に面よゆ〳〵きてとく人
よん潜さすりくまき
寺のあ〳〵りたん人とゝ何ぬる
侍と共ぬる文字のゝよめはちん
ん〳〵ゝゝ共ゝ小白ん〳〵て行るに
第六 潜藝能 侍りかゝりとゝ共ゝ共ゝ
ん〳〵て者すゝ類ゝ 式ゝ共祝ゝ 左筆
付句ゝ共ゝよゝ 好ゝ面
第七 俗謡能 共ゝ平世俗のはゝ 謡曲ゝ

ゝ付て共ゝ侍ゝ潜ゝ共ゝ式ゝいゝ共ゝ
侍ゝ潜ゝ共ゝ系ゝ平ゝ者ゝ類ゝ
第八 世話能 共ゝ世話ゝ仕ゝ 發句
付句ゝ多ゝ
潜中ゝ共ゝん人なゝ
一夢や情の最科 ゝ共ゝ沢
共ゝ小白雑腸 付句ゝ多ゝ
ゝ小白 山のかゝりとゝ 鐵鬼
ゝ人数ゝ 付ゝ

第九 謡詞 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[

ゆえなく好みて又は歌れを抓れば
るとおりへ俳諧人は百韻はさても
若しかの歌なれいひ句にてすりる
ものは俳諧よりはあらぬて病者れ
むれ抓よりて侍るよりはれとかる
とも思つる人はかくよりは本歌をよ
み習ふつき事なれ花は春なりあ
るを以ん人なりれ春門山うは深山木の
こも抓そしんをうこうなるよりとあめれ

ここうなるよりもあるは先うすかりてや
はありへうさ抓ゆ俳諧の席より服を
見知きは歌をめこうなる人歩りは
俳幅の類なりて本歌をれ事一元
小二句三句よりは無しといひ雪月
花等は四句五句数を定めをうれも唯
抓歌を以貴歌すり所以へ又句れ
深抓きりとて志やけるよりは
抓ゆ武は古事付なれ

めるに人ハ白毎ふるくしくはのこと
葉ふる俳諧の葉ハ和
歌ハ詩聯句
歌かるいとも詩聯句
又ハ俳諧ハ人の席ハ心さすき
めりて世くもまの葉ふつくめる
なること句まとまり 百論懐紙
席破点ハ俳諧ハ
板ものまとまり ふる九葉のうち口
きて白数多かるハ俳諧
なるべ 俳諧句ハ

四道之奇

幽　半　皆　背

於可受師説

但分不ハ右よりの限り無之勝ル
も白黒ハ唯只十分二ツ注と付
て すべ足と為ル少しさすり秘事也
の事ハ乃ち同じ所ハ一双ハ道
一分ハ是ハ一双ハ道

此一冊者雜諸一通之
爲秘書依御所望令
相傳之努々倪見有
閲鋪者也

元禄七甲戌七月吉日　木戸常陽

小林氏乙中雅丈